

茨城県植物園椿展と「春の台」
～平成30年度第7回茨城県植物園椿展報告～

事務局 小泉不二男

2月末の県フラワーパーク椿展は、昨冬より寒さが厳しくて河津桜が咲かず、来場者が少ない結果になりました。その後、お彼岸過ぎから一転し、急に春めいて気温が20度を超す日が続きました。各地で桜が早めに散ったため、桜祭りに花がないなどとニュースになるほどでした。

茨城県植物園椿展は4月15日、日曜日。

花が残っているのかやきもきしつつ前々日の金曜日午後、準備のために美浦村の椿畑に中山、大関、有田、阿部、植竹の諸氏と龍ヶ崎椿展で入会したばかりの百瀬さんが集まりました。

百瀬さんはここ数年の椿展や講習会には皆勤賞といえるほど参加されていたこともあり、新入会員とはいえ皆さんとは旧知の間柄。早々に打ち解けました。

椿は花期を過ぎたものが多かったものの、たとえばエレガンス・スプレンダーなどは今まさに満開のさ中。牡丹のような大輪華麗な花で枝が重そうです。また、酒中花は風にそよいで、小鳥が舞うごとし。

手慣れた皆さんが切花展示の枝を次々に切っていました。



エレガンス・スプレンダー



酒中花

今年から、展示花は畑で花瓶に作ることにしたので、畑の作業はいつもより時間がかかるようになりました。ただし、会場搬入後は、陳列するだけで済み、会場設営が大幅に簡略になっています。

この日たまたま、木村造園さんが椿畑のヤマザクラの枝おろし作業中。樹冠が大きくなりすぎ、椿の花着きをよくするための選定作業をお願いしたの

です。病気療養中の会員の木村正博さんに代わって奥様と今や逞しい跡取りとなった息子さんが、久しぶりに会員と再会。お父さんそっくりの息子さんを囲んで、春の日永、作業の合間のお茶でのんびり談笑しました。

椿展当日の天気予報は、春の嵐というので前日の準備中に「明日は来場者ゼロということもある」などと聞こえてきて、恨めしく空を眺めたりしました。

案じたとおり当日は雨でした。

ところが、朝、家内からいつものように植物園近くの野菜直売所に立ち寄りたいと云われ、ほうれん草など品定めをしていると、これから椿展に行くというお二人のご婦人方からさっそく声を掛けられたのです。

今年新調した茨城つばきの会のロゴ入りジャンパーが目にとまったのでしよう。口を揃えて「毎春椿展が楽しみ」とおっしゃっていただき、雨天をものともしない椿ファンとの出会いに元気が出ました。



会場風景



新調の会員ジャンパーで切り花プレゼント

実際蓋を開けてみると9時開場とともに雨の中を次々と来場者が訪れて、一日で160人の方がお見えになるという盛況ぶり。予報より風が穏やかだったとはいえ、雨天を押しして椿を見に来てくれる方がこれだけいることにはあらためてやり甲斐を感じた次第です。3年続いて雨に祟られたものの、県植物園椿展はこの地域の椿ファンにしっかり根付いていたのでした。

いうまでもなくこれは、植物園職員の藤澤正巳さん、小林慎行さん、小野村仁子さんによるポスター製作、各方面への働きかけによるものです。

また事前の会場設営および展示終了後の会場復元もすべて園側でおこなっていただきました。準備と運営に当たる会員から「ここは花を運んでくるだけでいいので助かる」と何度も聞いています。あらためて感謝申し上げます。



園作成のポスター

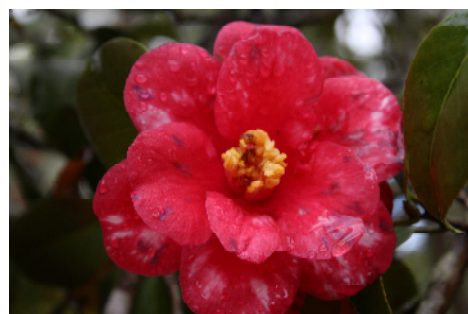


今年購入の一輪挿しによる展示

椿展の合間に、手の空いている会員たちで園内の椿園を見学しました。椿園は、園の一角に古くから造られていたとのこと。われわれが椿展を続けていることもあってか、園ではせっかくの椿園をさらに整備充実させたい意向を持たれたようです。



椿園



有川（あるかわ）：希少な江戸椿

昨年夏、私と染谷治正会員が依頼を受けて現地調査し、整備に向けて若干の助言等をさせていただきました。今回、あらためて見学して、日陰を作っていた檜などの高木が剪定伐採された様子やあらたに植栽された苗木などを見ることができました。

この椿園には貴重な品種もあり、いずれは椿展開催時に来場者向けに見学会を催せれば、さらに椿への理解が深まるのではと考えています。

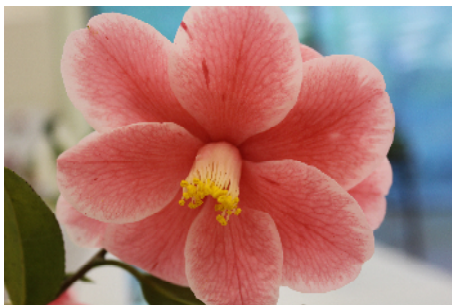
今回の椿展は、遅咲き品種中心でしたが、その中で春の台が出品され、話題になりました。

というのは、那珂市在住の植田文弥実行委員長が「色分け花図鑑 椿」（桐野秋豊著 平成17年刊）を持参されたので、たまたま春の台のページを見て

みたのです。熱心に下線が引かれたその本の中に、「春の台」は「“白地”よりも“桃地”がはなやかで人気があるためか、市販苗は桃地が多い。」とありました。



春の台（小泉出品）桃地

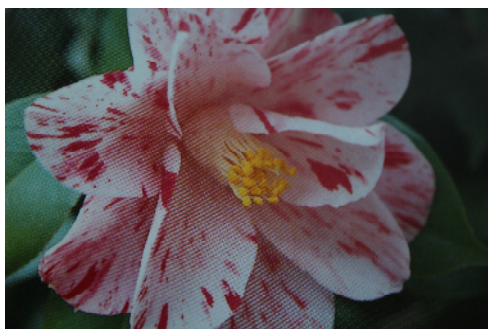


覆輪春の台（染谷出品）紅地

本の写真から出品花は桃地と判明しました。椿畑で20年近く育てて3mほどになっています。日あたりがよく花がびっしり咲きます。これが春の台とばかり思って育ててきました。

ところが、“色分け”によれば、どちらかというところ“白地”が正調で桃地は後に広まった枝変わり新種のような記述です。

実際、本には“白地”春の台の写真が大きく載っています。



(左) “白地” 春の台
「色分け花図鑑椿」より転載

“白地”というも薄い桃色とも見える。

桐野先生は、春の台の地色を
“白～桃”と云われている。

他方、「現代椿集」（昭和47年刊）に載る写真も“白地”です。ただし解説で大平一利氏は“白”ではなく「淡紅地」としています。加えて「地色には個体差が大きく、淡いものから濃いものまであり」とも述べられています。

やはり“白”が本筋、伝統の春の台なのでしょう。

それが華やかな“桃”に押されていつの間にか取って代わられていたのです。日本ツバキ図鑑の表紙を飾る「春の台」も“桃”になっています。

桐野先生は、普及した“桃”と区別するため敢えて“白”と強調されたものでしょう。今回も、先生の慧眼に敬服しました。

先生がご健在であればかつて一緒に小室山や神代植物園で花を見ながら勉強会をしたときのように、いろいろと教えていただいたものと思わざるを得ません。春の台については椿園で先生より教えていただいていたはずでした。

勉強会の内容をまとめた拙文を読まれた先生が、「これをもっと続けて、共著で書いてもよい」とまでおっしゃっていただいたものを、現職中の仕事にかまけて事が成らなかったことが悔やまれます。

こうなってみると、忙しいなどというのは些末な言い訳に過ぎなかったとさえ思えます。

一方、染谷会員持参の「覆輪春の台」は、「色分け」において「珍品」で「本書掲載が初出」（平成 17 年）とされています。写真は覆輪が少ないのが残念ですが、「紅地」が美しい。どちらかというとな覆輪江戸錦や沖の浪で見るとような細かい網目状の紅地に似ています。

華やかさがあり、さらに桐野先生が「色分け」で紹介したこともあってか、現在は、ネットをみると多くの苗木屋さんで販売しています。新たな春の台として頭角を現しているのです。

これまで春の台のことは分かったつもりでいました。ところが桃地が枝代わりとして現れ、近年は紅地の覆輪がもてはやされているのです。さらには、濃紅白星もあるとのこと。古典品種でありながら人気の新花を生み出していくところに驚きを感じます。



(左) 赤春の台

(ネット上の画像を転載)

我が家の春の台にも赤花が咲く。花の半分のみ赤の花もある。5月の椿枝剪定時に他の椿に紛れていた2mほどの赤春の台を椿畑で“発見”。これまでの無関心を知る。



(左) 濃赤白星の春の台
(ネットの画像：赤春の台の中
にあったもの)
「現代椿集」に云う“濃赤白星”
はおそらくこれか。我が家の春
の台にはない。

《追補》

その後、日本ツバキ協会理事の高野末男氏に春の台について問い合わせをしました。伝統の白地春の台を確かめたかったのです。高野氏は各所の椿を観察し写真を撮っているので椿園の収蔵品種に詳しい方です。春の台について知っていることを教えていただければと思ったからです。

日を経ずして高野氏より次のような連絡が入りました。

「春の台の地色については見過ごしていましたが、確かに図鑑などを見ると表現が微妙に変わってきていますね。

私が撮った春の台

1. 森林公園 2. 川口花と緑の振興センター 3. 神代植物園

と比べてみると微妙な違いがありますね。

これから春の台をみたら、地色の点についても観察していきたいと思います。」

とのメールと、合わせて画像も送られてきました。

高野末男氏撮影の「春の台」



武蔵丘陵森林公園



川口花と緑の振興センター



3枚の写真は、写真なので判然としないものの、どれも桃地というほどの濃さはなく強いて言えば“白地”と一括りにしても良さそうです

神代植物公園

森林公園椿園は、中村恒雄先生が造園を監修されています。また、川口の花と緑の振興センターも先生が椿を研究されたところと聞きます。これらの椿園に古くからの伝来品種の白地春の台があるのは当然といえば当然です。川口の皆川家からの椿が多く入っているという神代植物公園も同じでしょう。

来春、これらの椿園で自分の眼で春の台を確かめる日が今から楽しみです。

はしなくも今回、春の台と思い込んで育てていた椿が枝変わり品種であったことを知り得、さらに名だたる椿園の春の台が白地であることも画像からですが予想できました。ひとえに高野末男氏による椿写真の積み重ねのたまものです。感謝に耐えません。加えて、快く画像を提供いただきましたことに重ねて深謝いたします。